

悪役令嬢の兄です、ヒロインはそちらです！
こっちに来ないでください

Characters

幼少期

シャルティ・サングイス

ルデイヴィスの義妹。
「悪役令嬢」になる設定だが
現在その兆候はない。

ヘルリ・ラジエ

攻略対象のひとり。
獣化魔術の実験のせいで
家族から虐げられていた。

ルデイヴィス・サングイス

悪役令嬢の義兄。
一家破滅の最悪な運命を回避するため、
義妹や攻略対象者たちと
真摯に向かい合うが……

レオンハルト・ロードヴィリア

乙女ゲームの攻略対象のひとり。
優しく完璧な王子様に見えるが、
周囲を外堀から埋めていくような
策士な一面を持つ。

マイズ・エースメイス

攻略対象のひとり。
大神官の孫で閥属性の持ち主。

イグニス・バイゼル

攻略対象のひとり。近衛騎士団長の息子。
厳しい訓練中に倒れ……!?

目次

悪役令嬢の兄です、ヒロインはそちらです！
こっちに来ないでください

7

番外編 悪役令嬢の兄は○○○を作りたい

303

悪役令嬢の兄です、ヒロインはそちらです！
こっちに来ないでください

プロローグ

幸せな人生とはなんで決まるか？

生まれた場所や家庭、どんな暮らしをしていくか……人によってさまざまだと思う。

けど、その中でも特に家庭と就職する職場の占める比率は大きい。過ごす時間が長いから、この二つで幸せな人生のおよそ七割が決まってしまう、それはおれの体験から言えることだ。

私生活と社会生活、どちらからも板挟みになった時、人は逃げる場所を失うんだ。

おれが生まれた家は平凡な普通の家庭、父さんと母さんが共働きしている普通の家族、だった。

だが、見た目だけは天使のような年の離れた妹が生まれてから、おれだけが家族の中で居場所を失った。

可愛げのない子どもと両親に言われ、衣食住は保証されていても家には自分の居場所がないのだと、妹を溺愛する両親を見て感じていた学生時代。

そんな家から逃げ出したくて、早く就職したくて、目の前が見えていなかったおれが新卒で就職したのは、世間的にブラックと呼ばれる……いわゆる社畜が生息する会社だった。

社会に初めて出た人間にはこの会社が異常かなんてわかる訳もない。ほかの会社でもこんなものだよ、と指導につけてくれた先輩は優しい疲れた顔で言っておれを囲い込む。

けどおれが独り立ちすると、次はお前が頑張る番だよと託すように寿退社していった。主夫になると言って……

先輩がいなくなつてから何年経つただろう。

自分がブラック企業で社畜として飼われていると気づいた時にはもういろいろと遅かったのだ。

ブラックな企業もある、辞めるなら後釜を用意してからにしろ、お前が辞めれば仲間が苦しむ、お前の代わりはいくらでもある、ここを辞めたら次はないなど……いいように丸め込まれて過ごす日々。

会社の歯車に組み込まれたおれには逃げ場などなかった、この生活が異常だと気づく余裕もなく、逃げ出すなんて考えられないくらい疲弊して……死ぬその時まで会社にいいように利用され続けたのを覚えている。

そう、死ぬその時まで……

十四連勤帰り、おれは……階段から足を踏み外して死んだ。

——はずだった。

ドタドタと物音が響く……

頭が痛い……？

いや、身体も痛い、重い……？ 誰かの声がする……？

「坊ちゃま！ 坊ちゃま……!! ああ、なんてこと……!! こんな大切な日に……主治医を！ 早く主治医を呼びなさい！ 坊ちゃま、お気を確かに！ 旦那様が外出中になんということだ……!!」

「いやああ!! 坊ちゃま、ひいつ……血が、血が……!! どうして……!!」

坊ちゃま……？ 誰だよ、それ……

おれの名前は坊ちゃまじゃない……おれは……おれは……？

ゆつくりとまぶたを開けると、真つ赤な絨毯じゅうたんに直面していた。頬に触れる柔らかいそれは、最後に見た帰路にある階段じゃない。明らかに室内の床だ。

坊ちゃまと呼ばれるおれの目の前を通り過ぎる人の足と知らない顔……視線をなんとか上に向けると、真つ青な顔をして覗き込んでくる男と女がいる。

誰……？ 何が起きたんだ……？ わからない……

目の前の男と女はおれの身体を抱きかかえて揺すり、何かを慌てながら話し、対応どうこうなどと言っている。

状況を説明してほしい。

けれど意識はつきりとしているのに、視界にモヤが掛かったような不思議な感覚のせいでおれはこの場から動けなかった。

これは、社畜を極めたおれが階段から落ちたってことか？

そのせいで見ている幻覚か夢なのか……？

それでも、この全身を襲う痛みは……紛れもなく本物の痛みだ……

夢ならなんでもこんなにも痛いんだ？ まるで自分が全身に怪我をしているみたいに痛い。

優しい看護婦さんが出てくるとかさ？ 夢ならもつと幸せなやつにしてくれよ……なんでこんな訳もわからない夢なんだ？

どうして、夢の中で知らない記憶があるような……訳わかんない気持ちになるんだよ……

次に目が覚めた時、目に映ったのはおれが足を踏み外した階段やその上の空ではなく、病院の無機質な白い天井でもない、豪華な彫刻を施された高い天井だった。

……ここ、どこ？

夢の続きにしてはやけにリアルな肌触りのいい寝具。これは社畜では買えそうもない素晴らしい触り心地で高級品だとわかる。

頭と手足に包帯が巻かれている感じもする。

目が覚めたら病院じゃない部屋に寝かされているってどういう状況なんだ？ もしかしたら階段から落ちて傷を負ったところを助けられて……？

いや、うちのご近所さんにこんな豪華な家、持っている人、いたっけ……？

とにかく自分の怪我の度合いを確認したい。この痛みはきつと打撲したのだろう、と自分の手を見る。

しかし、そこに成人をとうに過ぎた男の手はなかった。

あまりにも色白の華奢な手、それも子どもの手が目の前にある。

誰の手だよと握りしめると子どもの手も同じ動きをする。

……え、何？ 待って、嘘だろう？

まさかと思い、ベッドから起きるが視点が低い。

「な、なんでこんな視点が低く……それに手が………は？ ……か、鏡、鏡………！」

辺りを見回すと広く豪華な室内に見合った姿見が目に入った。

この異常な状況を早く確認したい、そんな気持ちで酷く痛む身体を引きずり、姿見までたどり着く。一心不乱で覗き込み、おれは絶望した。

美しい装飾を施された姿見に映り込むのは、連勤明けで目の下に隈を拵え、くたびれた三十路の社畜ではなかった。おれとは似ても似つかない整った顔立ちの少年だ。

艶のある先端にかけて色褪せた暗い赤色の髪、血のような赤い瞳の、どう見ても幼く、包帯を巻かれた箇所が痛々しい……六、七歳ほどの美少年が鏡の中にいた。

「は?? ……だ、誰だよ……これ………うぐつつ!!」

急に動いたからなのか酷く頭が痛い、立ってられない。

思わず姿見の前に跪くとまた意識が遠のく。

どういうことなんだ？

階段から落ちたおれは……社畜だったおれは？

知らない、わからない……

ここはどこなんだ……おれは誰なんだ………？

意識を手放すおれに、誰もその答えを教えてはくれなかった。

第一章 転生したのは乙女ゲームの悪役令嬢、の兄（モブ）

再び目が覚めた時、おれは社畜だったところのおれの姿に戻ってはいなかった。

簡素なアパートの部屋も、くたびれたスーツも、目の下に隈を作る社畜の顔もそこにはない。

豪華な室内にオーダーメイドみたいな服を着て、包帯を巻かれた幼い少年がいる。

どう考えてもこの美少年がおれだ。

頬を抓^{つま}ったり頭を強打すれば夢から覚めるのか？

そう思ったが、すでに全身が痛いのにこれ以上痛くしても何も変わらないだろう。

それどころか恐ろしく不思議な違和感が全身にまわりつく。

「おれは、ぼくだけど……おれじゃない??」

社畜という言葉にむしろ違和感を覚え、必死に考えを巡らせる。

冷静になると、これまでの……この赤い髪の美少年として暮らしていた日々の生活が脳裏を駆け

巡り、社畜だったところのおれの記憶があることが異常なのだと理解した。

さきほどあった出来事を思い出し、その気持ちはさらに強くなる。そこでおれの記憶はまた途絶えてしまった。

誰かの声で目が覚めると、おれは姿見の前で倒れていて……メイドと思しき女性^{お婆}が悲鳴を上げながら「坊ちゃまが倒れている」と叫んで、おれを揺すつてたつけ？　なんか相当焦ってるようだつたよな？

執事みたいな人にまるで壊れ物に触るように優しくベッドまで運ばれて謝りたくなつたし、坊ちゃま坊ちゃまど、泣き叫ぶメイドの方が痛々しくて申し訳ない気持ちになつた。

再び寝かされたベッドの上で、医師のような初老の男性に診察？　を受けて、「痛みがなくなるまで動いてはいけない」ときつく言われた時泣きそうになつて……

おれじゃないおれ、この赤い髪の美少年の気持ちが溢れてくる。

これが現実なのだと、心が叫んでいるような変な感情に眩暈がした。

そんな中で初老の医師がよくわからない呪文を唱えてくれて……少しだけ眩暈と痛みが和らぐのが恐ろしかった。

社畜としてのおれと今のおれの記憶が混ざり合う、気味の悪い状態の中で肌触りいい高級寝具に寝かされる。

そしてメイドや執事らしき人が甲斐甲斐しく、おれの世話をしてくれる現実をただ受け入れる。

そうか、目に見えるこの状況が現実なんだ。

痛みと眩暈の中で断片的に浮かんでくる、前世のものと思えない社畜の記憶が蘇る。

社畜として暮らしていたおれが……階段から落ちたあの日、あの場所でおれは死んだ。

——そしてこの赤い髪の少年として転生を果たしたのだと。

身体の痛みと気味の悪い眩暈に何度か寝て起きてを繰り返した。

そのうちにどう頑張ったって三十路だったおれには戻れないと知り、とりあえず……これはたぶん生前流行っていた異世界転生というもの、だよな？ と、無理やりにも理解し、受け入れようと試みた。

この赤い髪の少年がおれ……奇しくも互いに階段から落ちた状況は理解した。

しかし傷を負った理由など必死に思い出そうとするが、なかなか思い出せない。

今日までの出来事とかはなんとなく覚えてはいるけど、直前の記憶がかなり曖昧、社畜だったおれの記憶は断片的だ。ぐちゃぐちゃに丸めて中身が見えない紙のような変な違和感がある。

階段から落ちた時、変なところでも打ってしまったのか、はたまた社畜のおれの記憶が邪魔してゐるからなのか……どちらも変わらないか。

「どうしよう……これから……」

メイドや執事がいる豪華な家具のある家、そこに住む「坊ちゃま」と呼ばれて大切にされている感じな今のおれ、こんなにも怪我するって何をしてたんだよ。

確か執事っぽい男性が『旦那様の大変な時に！』って感じのことを言っていた気がする……それ

が怪我をする原因に繋がっているのか？

記憶が混濁して曖昧で予想しかできない今、動こうにも身体の痛みが引かず、ただただ天井を見ながら過ごしていると、焦った足音と共に自室の扉がノックされた。

またメイドさんでも来たのかと入口に目を向けると、ドアを突き破るくらい激しく扉を開いた男性と目が合う。

「ルディヴィス!! 家令から連絡があつて……階段から落ちたと聞いた。大丈夫か!!」

息を荒くし、やや青褪めた顔で「ルディヴィス」とおれを見ながら叫び、ベッドへ駆け寄ってくる一人の男性。

綺麗な赤い髪に、赤い瞳だ。姿で見えたおれの姿と色合いや容姿が似ている。どう見ても同じ家の血が流れていそうな、とんでもないイケメンだ。

この人は父様だと、この少年の……おれの記憶が叫ぶ。

おれはこの人を困らせたくて階段から落ちた……そんな気持ちだが、赤い髪の少年の記憶と共に溢れ出した。

いや、異世界転生しちゃってるから？ おれの記憶なのだけでも……

どうも社畜と混在してしまい、全てが他人事に思えてしまう。

なんで困らせたかったのかは思い出せないが、父親に心配をかけてしまっていることだけはわかる。このまま寝ててもいいけど、今の状況を把握するためには少しでも情報が欲しい。

痛む身体をなんとか起こし、この世界での父に向き合う。

うっ、やばい、全身がズキズキする。

「父様……………申し訳ございません、お……………ぼくの不注意です。ご心配おかけしました」

「ルディヴィス！ 無理に起きなくていい……………！ 安静にしていなさい」

「いえ、大丈夫です……………骨も無事だと主治医の先生が仰っていました。メイドも執事も悪くないのです。ぼくの不注意で大事にしまい……………申し訳なく思います……………」

この父様もそうだが、赤い髪の少年、今世のおれ、ルディヴィスの見た目がどう見ても貴族のご令息とは思えない。そのため、自分の一人称がおれではまずいと、急遽ぼくと言った社畜の心得である低姿勢を披露する。

断片的にしか覚えてないが無駄な足掻きは上司に怒られるだけ、それはこういう場面でも一緒だろう……………たぶん。

若干俯き、反省と後悔をしている雰囲気醸し出しながら、父様だと思われるイケメンを見つめる。すると男性は素直に謝るおれを見て、やや驚いたようだが優しく微笑み、包帯を巻かれたおれの頭を労るように軽く触れ、そのまま頬を撫でられた。

「……………、無事でよかった……………お前に何かあったのではないかと思うと私は気がなかったよ。今日、朝に話したことがお前にストレスを与えてしまったのかと……………」

「父様……………」

「母様を忘られない幼子に、酷なことを言ってしまった私にも落ち度がある……………すまない、ルディヴィス」

とても優しい雰囲気紳士のイケメン父親だ。

そんな彼が言った朝の出来事とは……………？

まだ社畜と少年の間で記憶がぐるぐるしているおれには、何について謝罪しているのかわからなかった。

今はとにかく情報収集も兼ねて、この場をとりあえず凌いでなんとかしておこう！

そんな気持ちで父様の手にすり寄りつつ動く。

「父様……………ごめんなさい。ぼくっ、ぼくっ……………気が動転してしまったんです！ 父様にこんな顔をさせたい訳じゃなかったのに……………！」

絶妙なタイミングでぐずぐずと泣き出す。

その場を凌ぐのに子どもだからこそできる、とりあえず泣いて謝る行為はきつと効果的はずだ。だって……………朝の話も思い出せない状況で、これ以上会話を続けるのはちよつと困る。

ルディヴィスが何を思っただけで階段から落ちたのか、それを知らないとおれがおれであることを疑われてしまう。

階段から落ちたせいで頭を打ち、おかしくなってしまったと思われる可能性だってない訳じゃない。

せめて朝のお話の内容を教えてください、ほんと！

おれ的には初対面、しかし確実に実父だとわかる不思議な感覚の中で、父様は泣き出したおれをベッドに乗り上げながら抱きしめてくれた。

温かい胸の中で泣くおれ……心が締め付けられるのは少年の感情なのだろう。

「ルディヴィス……幼いお前には理解しきれないのはわかる。しかし、私は公爵家当主であり、国の宰相も務めているのだ。多忙で不在になりがちであることはわかるね？」

幼子に言い聞かせるように優しい口調で、おれを強く抱きしめながら父様は言葉を続ける。

「今朝話した通り、お前に寂しい思いをさせたくない、だからこそ私は再婚を選んだ。その気持ちは理解してくれ。せめて一目だけでも会ってくれないか？ とても優しく素敵な女性なんだ」

ルディヴィスが階段から落ちて父親を困らせなくなるほどの問題、朝のお話が判明した。

まさかの父様再婚話だったか、そうでしたか！ なるほどね！

そうかそうか、確かにそうだよなあ……

今のおれ、このルディヴィスって六、七歳くらいの子には確かに辛い話だよな？

わかるよ少年、いや、社畜思い出す前のおれんだけどね？

親の再婚なんて地雷でしかないよな……なんとなく階段から落ちることを選んだ気持ちもわかったよ。

大怪我をすることで自分を見てほしい、これ以上父様を再婚相手に会わせたくなかった、父様を

自宅に引き戻したかったんだよな？

新しい家族なんて不安でしかない。

今の生活を変えたくない、会うことすら嫌だと逃げたかったってことだろう……

うん、わかるよ、その気持ち。

けど……大丈夫、社畜のおぼろげな記憶を信じろ、ルディヴィス！

毎日押し寄せる、とんでもないクレマーにも平和に対応できるおれの記憶がうつすら蘇っているんだ、継母の一人や二人なんてことない。

むしろ精神年齢としてはアラフォーの域に達するレベルに進化しているじゃないか！

おれに任せろと心の中でこぶしを握り、返答を待つ父様の手を取ってコクリと頷く。

あえて言葉はいらさない、視線と頷きのみで反応するのが大切だ。

不安な表情は隠さずに、それでも父様の気持ちを汲んで対面しようと決めた……そんな雰囲気醸し出すのが重要だ。

こうすれば再婚相手の顔合わせの日が訪れても、父様はおれの気持ちを汲んで対応してくれるはず……！

……と、想定していたが、なぜか父様は再びおれを痛くないようにそっと抱きしめ、ベルを鳴らすと執事に指示を出した。

えっ？

「わかってくれて嬉しいよ。せっかく来てもらったのに会えないのは悲しいからね。きっと会えば一目で気に入ると思う」

「……え？」

「さあ、入ってくれ」

父様、今なんと仰いました!?

ちよつと待つて、待つて??

おつと、これは？ まさか？

今日つてその継母との初顔合わせのそんな感じの日だったの??

執事っぽい人が大切な日について言つたの、そういう意味!?

そういえばずいぶんと整った服着てるなと思つたけど、普段着じゃなくて正装だ、これ。

再婚相手と顔合わせするってかなり重要な日だぞ？

継母と顔合わせしたくないって理由で、盛大に階段から落ちることを選んだの、ルディヴィスくん!?

おいおい、少年よ……さすがに当日に階段から落つちて騒ぎ立てるのは駄目だと思う。

やったの、おれなんだけどもね!! 異世界転生先でさつそくやらかしてゐるわあ。

結果的にメイドさんたち大号泣の血まみれ大惨事を生み出してゐるつて……本当にすみません。

父様に抱きしめられながら一人こっそり反省会をしていると、父様の再婚相手が執事に連れられ

ておれの部屋に入つてきた。

継母という響きから想像するイメージとはちよつと違う、派手すぎないシンプルなドレスを身に纏つた、アプリコットの髪色にサーモンピンクの瞳の優しそうな女性……とその後ろに隠れるように入室してくる幼い少女。

女性と少女……そう、父様が紹介したいのは二人だった。

父様、まさかの子連れと再婚予定だったの!?

「こちらにおいで、ペトラ、シャルティ。ああ、ルディヴィス……こんな時だ、無理に話さなくてもいいから……少しだけ顔合わせをしよう」

「失礼します、ルディヴィス様。お身体は大事ありませんか？ このような状況で……突然の訪問、

ご挨拶失礼します……」

「……えっ？ あ……はい……」

「私はペトラ・レルム。レルム伯爵の娘であり、ルディヴィス様のお父様、ログリット様とお付き合ひさせていただいてます。こちらは娘のシャルティです」

まさかの子連れつて衝撃に言葉を失い、動揺するおれをよそに、父様は嬉しそうにおれをベッドへ優しく寝かせて継母となる女性の元に向かい、用意された椅子に座るよう勧めた。

さらに「ルディヴィスの義妹になる子だよ」と連れ子の女の子、シャルティと呼ばれた少女を手招きした。

「しつれいしましゅ……」

父様に促されて恥ずかしそうに前に出てきた再婚相手の子ども、シャルティという少女。

継母となるペトラさんに少しだけ顔立ちは似てるけど、色合いは全然違う。

腰まで届く、長く美しいルビーレッドの髪に、おれや父と同じ血のような赤色の瞳だ。ツヤツヤでぷつくりとした桃色の唇を震わせ、自己紹介をする幼い少女……

その姿を目視し声を聞いた瞬間、おれは雷を打たれたような衝撃を受けた。

おれはこの子を知っている。

シャルティ……

レルム伯爵家で生まれた赤い髪の少女シャルティ。

公爵家の義妹、シャルティ・サングイス。

真っ赤な髪、血の色と呼ばれた一族。

悪役として死ぬ運命の……女の子……

それだけじゃない。シャルティが再婚相手の子どもなら、おれは……

『……ねえ！ お兄ちゃん！ このゲームやばいの！ めちゃめちゃやばいの！ この乙女ゲームの聖女、私と同じ感じの名前なの！ それにイケメンもいっぱいだし！ あ、お兄ちゃんどのイケメンが好き？』

『……………』

『え、それ？ それは女子！ イケメンじゃないじゃん。お兄ちゃんはシャルティ・サングイスがタイプか。絶対未来に絶望しか待ってない可哀想な当て馬、血濡れの悪役令嬢が好きだなんて変わってるね。馬鹿みたい！ あはは！』

頭の内側が圧迫されるように痛み、視界が歪む。

それと同時に断片的に社畜だったころの……生前の記憶が脳内を犯してくる。

思い出したくなかった声が脳内に響く。

おれの休息を、つかの間の安眠を妨害し続けた妹の言葉が浮かぶ。

悪役、令嬢……シャルティ・サングイス。

おれの部屋に入ってきた妹に急にゲーム画面を見せられた。

好きなキャラを答えるって言われて選んだ赤い髪の女の子、その子が幼い姿で目の前にいる。どうということなんだ？

義理の妹は、前世の妹が好きだったゲームの中の悪役令嬢？

それじゃあ……悪役令嬢と共に暮らすことになる、おれは？

……悪役令嬢の兄だ。

あまりにも衝撃的な事実と断片的な記憶が、一気に流れ込んできた。

おれは言葉を失ったまま、少女を見つめる。

見れば見るほど既視感しか覚えない。髪色も目の色も、少し吊り目がちな顔も……生前のクソミたいなおれの妹がやっていた、乙女ゲームの悪役令嬢が小さくなった感じだった。

……まさか、そんな馬鹿なことある？

階段から落ちて死んで、生まれ変わったのは乙女ゲームの世界ってことか!?

さらには悪役令嬢の母親の再婚相手がおれの父様で……

おれ、義理の兄になるの？

嘘だろ？

悪役令嬢の兄、まさかの兄だ……

てか、クソ妹が見せてたあのゲーム、悪役令嬢に兄なんていたのか!?

悟られぬように表情は変えず、停止しかけた思考の中で生前の妹の言葉を思い出す。

思い出せ、おれ！ ここで記憶力を発揮しないでどうする!!

……悪役令嬢は断罪、確実な不幸を約束された哀れな当て馬だ。

じゃあおれは?? 妹は何を言っていた!? 思い出せ、思い出せ!!

『悪役令嬢にはねー、お兄ちゃんがいるんだよ、あ！ ちょうどお兄ちゃんみたいな感じのモブっていうの？ 一度も顔出ないし、文だけの笑うよねー!』【悪役令嬢の兄もまた一族もろとも、

死に絶えました!】。こんなナレーション一言で出番終了なの！ おまけ扱いで死んでるって！ 超ウケるゝあははは!』

そうだ……そう言つてクソ妹は笑いながらおれを指さしていた……

ルディヴィス・サングイス、悪役令嬢と共に暮らしていたとされる兄だ。

ゲームで顔すら出ない本気のモブ。

ストーリーに一切関わらないモブだ。

そのせいなのか妹のセリフは思い出せるのに、ルディヴィスについてはモブとしか情報が出てこない。

全く役に立たない情報がないモブか、おれ。

てか！ なんだよ、その悪役令嬢の兄ってポジションと死因、兄もまたつて。

何もしてないのに死ぬの!? ふざけんなよ、勝手に巻き込んでんじゃねえよ……!!

もしかして……だからか？ 子どもながらに不幸になりそうな気配を察知してこの少年ルディ

ヴィスは動いたのか？

いや、おれなんだけど！

父様を再婚させてはならないって気持ちで、モブながら必死に運命を変えようとした？

……いや、違うなたぶん。普通に新しい母や妹なんていらない！ ってだけだな。

それよりも、待つて、おれは……悲しき社畜人生を終えたと思ったら、次は義理の妹の悪行に巻き込まれ、一言で済まされる断罪確定の人生に転生したつていうのか？

おれ、また無駄に早死にするの……？

「あ、あの……あたし、シャルティ……です。よ、よろしくおねがいしましゅ」
「……」

おれが何も喋らず、相手に対して非常識極まりない態度を取っているのはわかる、しかしそれどころではないほど混乱していた。

再婚相手には申し訳ないが、相手をできるほど心に余裕がない。

考えれば考えるほど冷や汗が出る。

気分が悪い、全身の痛みのせいじゃなく、寒気が止まらないんだ。

「あの、だいじょうぶ？ おにいたま……？ くるしいんです、か？」

「シャルティ?? どこへ行くの？」

悪役令嬢となんて関わりたくない。

そんな気持ちが溢れ、具合が悪いから出ていってほしいと上手く相手を傷つけずに言えないか必死に考えていると、継母となる女性の言葉をスルーしてシャルティと呼ばれた少女がおれの近くに来るのが見えた。

なんで、どうしてこっちに来るんだ……？ お前は未来の悪役令嬢なんだろう？

ゲームの画面に全く出なかったモブのおれを、説明文一つで巻き添えにする悪役令嬢。ヒロインへの激しい嫉妬と憎悪の末、断罪を約束された、血濡れの悪役令嬢、そうなんだろう？

悪役令嬢になる存在が、なんでそんな泣きそうな顔をしてモブに近づいてくるんだよ。

「おにいたま……からだ、いたい、いたいの？ シャルティもいたいとないちやうから……おにいたまのきもちわかるよ？ だから、はやくよくなーれて、おまじないしてあげる」

ゆっくりと近づいてきたシャルティは、おれが寝ているベッドの前でしゃがみ込む。

今にも泣きそうな顔で未来の悪役令嬢は「いたいのこっちにおいで」と、おれの手を握り自分の頬に当て、おれの痛みを自分に移すようなおまじないをしてくれた。

すりすりとおれの痛みを和らげようとする心が伝わってくる、小さな手でおれの手を握る姿はとても

そんなことで痛みなんて和らぐはずなんてない、けど、だけでも。

優しい綺麗な目をしたこの子が心からおれを心配しているんだとわかってしまう。

必死におれの痛みを和らげようとする心が伝わってくる、小さな手でおれの手を握る姿はとてもか弱い普通の少女でしかない。

記憶の中にある悪役令嬢と雰囲気は似ても似つかない、この子が本当に悪役令嬢？

いや、違う。

どう考えたってそうなるとは思えない。

こんなに優しい気持ちで人に接するこの子が、人を不幸にするはずなんてないんじゃないか？

幼さの残る舌足らずな話し方、小猫のような少し吊り目の綺麗な瞳で見つめられると何もかも可愛く見えてくる。

普通に可愛い、抱きしめて甘やかしたい。

常識的に考えたらロリコンだと思われそうだがそうじゃない、これは……母性？ 母性だ！

シャルティの可愛さには俺にはないはずの母性を擦る何かがある。

ここは、あの社畜の睡眠時間を削りにくる前世のクソ妹が言っていた乙女ゲームの世界じゃない。血濡れの悪女、悪役令嬢シャルティ・サングイスっぽい見た目をした、ただの女の子がいるだけなんじゃないのか？

そうだ、きつとそう！

よく似た同じ名前の人物がいるだけの、そんな世界と考えよう。

この子は……おれの義妹になるシャルティはどう見積もっても悪役令嬢って柄じゃない。

こんなにも無害で人を気遣う優しさがあって……可愛らしいじゃないか！

生前のクソ妹とは比較にならないくらいに可愛らしさ、社畜心がぶっちゃけ癒される。

再婚相手のペトラさんも気のよさそうな人みたいだし、いい感じにあつたかい家族になるんじゃない？

万が一！ もしも、乙女ゲームの世界だったとして、この子があのゲームのように悪役令嬢として断罪されそうになるなら……それをおれが許さなければいい。

おれが守ってやればいいんだ!!

「シャルティ。ありがとう。痛いのでつかに行っちゃったよ。ぼくのこと……お兄様って呼んでくれるんだね？ 嬉しいよ。ぼくもシャルティのこと、シャルって呼んでいいかい？」

「……っ!! はいっ!!」

「シャル」と呼びたい、おれのその言葉に義妹となるシャルティは溢れんばかりの笑顔で答える。

その素直な好意が嬉しいよ、可愛いなあ。どうしようもなく癒される。

シャル、おれの新しい世界で新たな家族となる、悪役令嬢によく似た女の子。

少しだけベッドから身体を起こし、もっと近くにおいでと手招きするとシャルティは嬉しそうに立ち上がり、おれに促されてベッドに腰掛ける。

ただでさえ素直で愛らしいシャルティの頭を撫でると、子猫のように甘えてくるのだからことさら愛しい。

さきほどまで父親の再婚相手なんて会いたくないと自分から階段を落ちた人物とは思えない、態度を一変させたおれの行動を見て、父様も継母になるペトラさんも、どこか安心したような表情をしていた。

シャルティの頭を優しく撫でながら思う、これが社畜を思い出す前のおれだったなら……

きつとそう簡単に二人を受け入れられなかっただろう。

徐々に鮮明になってきたルディヴィスの記憶を重ねて考える。

さきほどまでの酷い頭痛は、今はそこまで感じない。

前世のおれと今のおれの記憶が混ざり合い、安定してきている……そんな感じがする。

だからこそ、ルディヴィスが怪我を覚悟してまで避けたかった気持ちが痛いほどわかった。

普通に考えても子どもにとつて親の再婚はハードルが高いのに、さらに再婚の連れ子がいたとしたら気まずいに決まってる。

ペトラさんは穏やかでいい人そうに見える、シャルティもとてもいい子だ。

……けど、素直に受け入れて仲良くできるかどうかは別問題だ。

父様の再婚という状況に立たされた幼いおれの気持ちが溢れ出す。

どうして本当の母様がいるのに新しい家族なんて言い出すんだ、ほくは母様に捨てられてなんかない、いつか帰ってきてくれる、こんなこと受け入れられないという叫びや嘆き。

ルディヴィスが覚えている母の姿や声は臍^{おへう}気だが、長い間孤独だったのは確かだ。

なのに、母様と父様が離縁したという記憶はない。

どうして、捨てられたって感情になるんだ？

……その理由はわからないが、そんな状況で父様がペトラさんと再婚するなんて話をルディヴィスが受け入れられないのは仕方がないと思う。

新しい家族なんていらないと、おれは心を閉ざしていたんだ……

それにもう一つ、疑問というか確認しないといけないことがある。

今日、実際に会う以前におれはどこかでペトラさんとシャルティを見て、恐怖を覚えた記憶があるんだ。それもきつとルディヴィスが新しい家族を受け入れられない理由の一つだ。

どうしてシャルティは父様に似ているのですか？

なぜ髪色まで同じに見えるんです？

それにあまりにもおれと年が近すぎる……それはなぜ？

見れば見るほどシャルティの顔や髪色は父様やおれとそっくりだ。

彼女の可愛い瞳の色なんておれとほぼ一緒だ。

父様……あなたは何を隠しているんですか？

ただただ母様に捨てられたというやるせない気持ちしか残っていない。

本当の母様がいつどうなったかわからないが、父様が何かを隠していること、そしてペトラさんと再婚し、シャルティを娘に迎え入れるには特別な理由があるはずだ。

未来の悪役令嬢にシャルティをしないためにも、そのままにはおけない。

まずは転生前の記憶を思い出したせいで混乱した精神をなんとかしなければ……いろいろ思い出す時間が欲しい。

一人になるために、シャルティのおかげで痛みが取れて眠れそうだと父様に伝える。

父様は嬉しそうにゆっくり休めと言ってくれた。

シャルティはおれの部屋から出る時も何度も振り返り、花が咲くように微笑んだ。ベッドに寝た

ままのおれに手を振って退室した。

「はやくげんきになってね」と、可愛らしい声で励まされたら普通に嬉しい。

なんかもう、シャルティって悪役令嬢のはずなのに、可愛すぎないか??

……そこでおれは気づいた。前世の妹とシャルティを無意識に比べていたことを。

臍^{へらうけ}気で断片的にしか覚えていないのに嫌悪感しかない前世の妹と、打算的な笑顔じゃない、本心からおれを心配してくれるシャルティ。

うん、言うまでもなくシャルティの勝利だ、可愛いが溢れすぎている。

紹介するからと連れてこられたはずだ。義理の兄になるおれとどうすれば仲良くなれるか、どうやって声を掛けるか、きつといういろいろ悩んだだろう。

悩んだ結果、おれの怪我を心配し、義妹としておれを助けようとしてくれた。

幼くして人を思いやる心を持っているシャルティは、悪役令嬢によく似ただけの別人だと思っていた。それほど可愛い存在に今やなりつつある。

しかし、まだここがあのゲームの世界じゃないと言い切れない。

おれの名前だつて乙女ゲームで出ていたのだから、余計に気は抜けない。

だからこそ、シャルティ……！

お前はおれが義兄として考えうる最悪の運命から守ってやるから安心しろ！

メイドもおれの部屋から退出し、一人きりになった。

とにかく今は痛すぎる全身をどうにか休めて回復しよう。

まずは記憶と情報の整理、そして父様には早めに聞き出さなければ。

母様のこと、ペトラさんとシャルティのことを……

ゆっくり休みなさいと言われた通り、深呼吸をしてから目を閉じる。

おれは、「ぼく」であり……おれなんだ。

生きることに疲れたなんて言っていた社畜のおれはもういない。

公爵家の息子、ルディヴィスとして生まれ変わったのだ。

再婚を考える父様と新たな母様になるペトラさん、そしてシャルティと、これから生活していくんだ……生前、半強制的に見せられていた乙女ゲームに酷似した世界で……

……ゆっくりと身体を休めたかったが、いざ寝ようとするとなかなか寝付けない。それなら乙女ゲームについてなるべく思い出しおきたい。

断片的な記憶を探り、前世の妹との会話を思い出す。

目を閉じていると少しずつ蘇ってきた。

……甲高い妹の声……初めておれに乙女ゲームの話をしてきたのはいつだっけ？

……確かおれが夜勤明けで必死に帰ってきた時だ。

『お兄ちゃん見てみてこのゲーム！ 今最高に売れてるらしいの～！ 家でやるとお母さんに怒ら

れるから、ここでやっていい？ いいよね！』

そんなことを言っていた気がする……

男相手に乙女ゲームの紹介ってなんだよと白けた顔で妹を見た。

おれのアパートでゲームをしていいなんて一言も言っていないのに、あのクソ妹はズカズカと家の上がり込んでプレイし始めたわけ？ 怒るのも体力使うし、ベッドを妹に占領されたおれは床で寝たんだ、確か。

おれは日勤と夜勤を不規則に繰り返して、休みを返上して自宅でも仕事をしていた。

その貴重な睡眠時間を邪魔しに、毎日毎日昼夜問わず現れた妹、あいつがおれに見せてきたゲームを思い出せ。

大音量でやるもんだから、近所から苦情が来るかもって怯えただろう？

何度もタイトルコールだつて聞いた、あの乙女ゲームのタイトルは……

『光の聖女へ愛を灯す』

そうだ、確かそんなタイトルのゲームだ。

妹曰くSNSでも話題になった、豪華すぎる声優陣に絵師まで完璧の最高傑作。

内容は、聖女として選ばれた庶民の出であるヒロインが、魔法学園に入学して攻略対象たちの心を救い、悪役令嬢からの嫌がらせや数々の困難に負けず、幸せを掴む王道のシンデレラストーリー。

ノベルを主体に映像とアクション要素も盛り込んだゲームだったはず。

その聖女である主人公へ嫌がらせをするキャラクターこそ、悪役令嬢シャルティ・サンゲイス、おれが義理の兄となる予定のシャルティと瓜二つなのだ。

ゲームの中で彼女は常に淑女でありながら獰猛でヒステリックに振る舞う。さらには暴力的な一面を持っていた、真つ赤な髪に赤い目も相まって血濡れの公爵令嬢と呼ばれていたキャラクター。

ヒロインに対し、婚約者を奪われた、騎士を奪われた、自分の犬を奪われたなど、ルートごとに恐ろしいほど怒り狂い、ヒロインを排除しようとする悪女だ。

おれは登場人物紹介の場面だけで見た目からシャルティを選んだ。

妹は「お兄ちゃんて趣味も終わってる」と笑いながら、鞭を握りしめて血塗れで泣きわめく悪役令嬢シャルティの恐怖シーンのスチルを見せてきた気がする。

確かあれは夜勤入り前だった。これから仕事のおれの貴重な睡眠時間をことごとく奪い、それだけじゃなく人を馬鹿にして楽しむクソ妹……違う、今必要なのはその記憶じゃない!!

必要なのはゲームの流れとシャルティと関係のあるキャラについてだ。

しばらく続けると、いやいや何度も見せられて無意識に覚えていたキャラクターやストーリーの一部を思い出すことができた。

『光の聖女へ愛を灯す』のヒロインの名前はプレイヤーが好きに決められるが、初期設定では『ルチア』という名前が付いている。そのルチアという少女と攻略対象が主な登場人物だ。

攻略対象者は確か五人。なんかもう一人くらいいた気もするが思い出せないため、とりあえず五人のプロフィールを思い出す。

ゲームの舞台であるこの国の王太子殿下、レオンハルト・ロードヴィリア。

脳筋よりの近衛騎士団長の息子、イグニス・バイゼル。

番犬のような性格の国家魔術師騎士の息子、ヘルリ・ラジエ。

チャラい感じが特徴だった大司教の孫、マイズ・エースメイス。

それから、隣国からの留学生、ルイ・ベラニード。

そして、この攻略対象全てに対してかなりの激重感情で束縛し、暴走する悪役令嬢シャルティ・サングイス。

おれはその激重悪役令嬢の義理の兄……

「はあ……」

目を閉じたまま思わずため息が出る。

妹に有無を言わず無理やり見せられていたあの乙女ゲーム。

内容の詳細を覚えていなかったらどうしようと思ったが、まさかキャラクターのフルネームまでしっかり思い出せるなんて。

しかし、今となつては覚えるほど無理やり見せられてよかったと前向きに考えよう。

ストーリーもイベントもある程度覚えているなら、万が一ここが乙女ゲームの世界だったとして

もあの可愛い義妹を悪役令嬢にならないように守れるはずだ！

血濡れの悪女なんて呼ばれる未来を回避できる。

それに、乙女ゲームの世界を思い出すうち、ルディヴィスとしての記憶も段々と鮮明になってきていた。

おれは確かに生まれた瞬間からルディヴィスで間違いない。

そこに社畜だったおれの記憶が馴染んでいくような不思議な感覚がする。

新たに思い出したのは、「ぼく」の本当の母様は昨年「ぼく」が五歳の時に、この家を出ていったこと。父様は今はその理由を教えてやることができないと言った。

同時に母様はもう二度と帰ってはこないと言っていた。

そんなこと信じられないって「ぼく」は毎日、ずっと母様の帰宅を待っていたんだ。

なのに父様は新しい女性を母として迎えた。年の近い、「ぼく」によく似た子どもまで連れて……父様は母様を愛してなかったの！

「ぼく」を、愛してくれてなかったの？

そんなの許せる訳がないじゃないか!!

……そう言っておれの中で「ぼく」の幼い心が泣く。

家族がバラバラになる恐怖だけじゃない、「ぼく」は母様に捨てられたのだと受け入れなければいけない。父様が再婚するって事実が苦しいんだと泣いている。

自分自身のことだけど、泣きじゃくるおれの心が今にも壊れそうで……辛かった。

前世を思い出したのは自分の心を守りたかったからなのだろうか？

わからない……けど、おれの中には前世の大人だった記憶もあるからと、静かに心の中でおれは自分を慰める。

……そんな訳のわからない心の葛藤をしているうちに、おれは眠ってしまった。

誰かの気配を感じ、目を開けると辺りが明るい。

おれの手にかかぬ温かいモノが触れている？

そんな感じがして横を見るとなぜかおれの手を握ったまま、ベッドに乗り上げるようにして眠るシャルティの姿があった。

「シャル……？ どうしたの……？」

おれの声に、メイドが声を掛けてくる。

おれとシャルティを見守るために部屋の中にいたのだろう。

「おはようございます、ルディヴィス様。シャルティ様は半刻ほど前に旦那様とペトラ様と共に御見舞いにいらつしたのです……」

「父様やシャルがぼくのお見舞いに？」

「はい、『まだ眠っているルディヴィスを起こすのは』と旦那様が仰いまして、お待ちいただくた

めに椅子を準備したのですが、シャルティ様は手を握りながらそのまま寝てしまわれたようで……」

そっか……お見舞い、来てくれたんだ……

すやすやと眠るシャルティの頭を撫でると眠ったまま嬉しそうに微笑む。

おれは階段から落ちるほどの再婚を嫌がってた。

そのおれに嫌われまいと、好かれるために必死に考えて行動に移し、朝からぼくの部屋へ来たのだろうか？

……たぶん違う、シャルは純粹におれの怪我を心配してくれているんだ。

小さな手で昨日のおまじないの続きをしようとここに来てくれたんだろう。

父様とペトラさんも来てくれたのなら、いろいろ秘密にしている父様もおれの気持ちを心配してくれる気持ちはあるんだと思いたい。

仕事で忙しく父様が家にいなかったのは事実だけど、おれが困らないように衣食住全て不自由なく与えてくれた。

構ってほらなくても公爵である父様から一応大切にされている「ぼく」は、ゲームの世界で何一つ情報がない……完全なるモブだ。

けど、再婚するにあたって「ぼく」という公爵家の長男を無下にはできない……おれが受け入れなければ、この先大変なことになるのは容易に想像できる。

乙女ゲームでの悪役令嬢シャルティの様子と現状の「ぼく」としての記憶を考えると、きっとゲー

ムでの「ぼく」はペトラさんやシャルティを受け入れられなかった。仲良くなろうとしたシャルティの存在全てを否定し、傷つけ、あの悪役令嬢の性格を生み出したのだらう。

誰かに認めてほしくて、誰かに愛されたくて……そんな気持ちの暴走が悪役令嬢の誕生に繋がったのかもしれない。

眠るシャルティの頭を撫でると、頬をふにやりと綻ばせ猫のように手にすり寄ってくる。

うっ、可愛い……血の色をした髪色なんて言う人間がいたら殴ってやりたいくらいだ。

手触りのいいふわふわの髪の毛を撫でていると、とても癒される。

幼い顔立ちはまさに天使、ひたすら守ってあげたくなるし、なんだろうこの社畜の疲れ切った心を癒す可愛い存在は……

この子が本当におれの義理の妹になるのか!? 最高すぎる……!

うんと可愛がつてめっちゃめっちゃ大事にしよう、最高に素晴らしい兄だと妹に自慢してもらえ義兄になろう。

再度心の中で真剣におれは誓った。

任せておけシャルティ、一晩掛けて思い出したからゲームの展開はある程度わかる!

前世社畜だったおれを癒してくれた優しいお前には、笑顔溢れる幸せで素敵な人生を送ってほしいんだ……

誰かに恨まれて死ぬとかあっちゃいけない!

血濡れの悪女なんて絶対呼ばせない!

悪役令嬢として断罪なんてさせない、絶対!!

必ずおれが守るよ……!!

「……んっ……ふぁ……? ……ね、ねちゃいました……」

「おはよう、シャル……お見舞い来てくれたんだって? ありがとう」

寝起きのシャルティは目をしばしばさせてから、おれの声にふわふわと微笑む。

「おはようございます、おにいたま。からだいたい? だいじょうぶですか? おまじないしててもいいですか?」

うぐっ……!! つつ!!

取り入ろうとか打算的な感じじゃない、やっぱこの子、本心でおれの体調を気にかけてくれる……!

それだけじゃない、昨日おれが歩み寄りの姿勢を見せたからちよつと懐いてる!?

痛いの飛んでけーみたいなおまじないって可愛すぎる……!!

超絶可愛い表情と仕草ですり寄ってくるシャルティを見て、シスコンになりかけた。

恐ろしい子! おれ、デレデレしちゃうシスコンになりかけたわ!!



父様の再婚相手との顔合わせから一週間、前世のおれとルディヴィスの記憶はいい感じに混ざり合い、頭痛はほとんどなくなっていた。

階段から落ちた影響なのか、事故前後のことは思い出せないし、これまでの記憶もところどころ曖昧だが私生活には問題ない程度になってきている。

おれが寝込んでいる間、ペトラさんとシャルティは顔合わせ以外にも何か事情があるらしく、レルム伯爵家は帰らずにサングイス公爵家の客間に滞在していたらしい。

「ここはもうすでに私たちの家なのよ！」なんてシンデレラの継母みたいな発言や行動など一切せず、慎ましやかに過ごしておられるそう。

毎日おれの見舞いにも来てくれる本当に優しい人たちだ。

レルム伯爵家へ帰れない事情ってなんだろう？

怪我の治療のためベッドで過ごすおれが心配になって聞いても、父様は「今は治療を優先するんだ、時期が来たら説明するよ」と、はぐらかした。

理由はわからないが、時々ペトラさんの表情が曇っているのも気になるんだ。

とりあえずいろいろ不明なため、今わかつていることは……

おれの義妹が可愛すぎる!!

ってことだけだ。その一言でおれ視点の問題は全て解決する。

いや、まだ正式に父様が再婚していないからあくまで予定だが、それは些細な問題だ。

おれの中ではすでにシャルティをすでにしっかりと義妹として認識しているし、めっちゃめちゃに可愛がつてあげたい気持ちで盛り上がっているからね!

二人が屋敷に滞在しはじめてからさらに数日経ったころには、階段から落ちた打撲も徐々によくなり、歩く許可を主治医の先生に頂いて部屋の外へ出られるようになった。

午前午後とリハビリがてら庭を散歩するおれの後ろを、シャルティがトコトコついてくるのだから最高だ。

「おにいたま、シャルもいっしょにいきたいです」

舌足らずな喋り方で、めっちゃめちゃに可愛い顔でそう言われたら一体誰が断れようか？

否、無理、絶対無理、罪悪感でおれが死ぬ。

リハビリに付き添ってくれるシャルティと手を繋いで食堂に行ったり、隣同士で座って食事をしたり、おれが勉強を再開してからは隣で絵本を読みながら一緒にお勉強する天使になったりと、おれの義妹が最高に可愛い。歩く癒しアイテムでしかない。

臍_{はら}気に覚えている前世の記憶として壊れた社畜の心を癒してくれる可愛い存在、最高!!

父様曰く、本来顔合わせだけの予定だったが想像以上におれとシャルティが仲良くなったため、

今後のことも考えてペトラさんたちはサングリス公爵家での滞在期間を延ばしたらしい。

どこに行くにもシャルティはおれに嬉しそうについてくるし、そんなおれたちの姿をペトラさんも父様も優しく見ている。

仲良くできてよかったと、そんなふうに思っているのを感じる。

それは使用人の皆も感じているようで、おれが家で寂しい思いをしなくて済む日が近いですねと噂していたのを聞いた。

第一印象通り、ペトラさんは本当にとても優しい。心からいい人であると滞在中一緒に過ごして把握した。猫かぶりするやばい女性じゃなかった。

長年の社畜の記憶が戻ったこの身体は他人の裏表に敏感なのだ。

父様は朝一緒にご飯を食べると、宰相として仕事に向かうため夜中まで家を空ける。

けれど朝食の時、おれが再婚を受け入れていると感じたのか、本格的に再婚の準備を進めていると教えてくれた。

しかし、事情があつて盛大に挙式はできないが、自宅で婚姻パーティーを行うと言った。

だからその事情ってなんですかね、父様……？

ペトラさんもシャルティも良い人なのは理解した。

しかし父様、あなたが隠している事情によつてはおれはあなたを許せないかもしれない。

隠し事をされたままではこれから先、何か問題が起きてしまうかもしれないから……

だからこそ、正式に父様とペトラさんの婚姻を結ぶ段階になり、手続きのためペトラさんたちが一度伯爵家へ戻った日、おれは父様に本当の母様について聞くことにした。

「父様、少しお時間を頂いてもよろしいでしょうか？ ……どうしても、ペトラさんやシャルティ

をこれから家族として心から受け入れるのに、幸せな家族になるために、知りたいことがあるのです」

あえて就寝前、父様がワインを飲みつつ自室で本を読んでいる時間帯を狙って、これからの幸せを考えてと強調する。

突然の訪室に父様は一瞬驚いた顔をしたが、おれの訪室を拒否しなかった。

手招きし、おれを膝の上に乗せてくれた。

そのまま頭を撫でられながら父様と目を合わせる。

「話とは……こんな夜更けにどうしたんだい？ ルディヴィス」

「どうしても知りたいんです……ぼくはペトラさんもシャルティも大好きになりたい。でも、でも……！ ぼくを置いていつてしまった母様がいつか帰ってきたら……？ ぼくは、どうしたらいいんだろうと不安でたまらないのです……」

「……っ！」

父様の胸に甘えるようにしがみつく。

あなたの幼い息子が二人の母を抱える可能性に怯えているとひたむきに伝える。

おれの記憶では、本当の母様と父様の離婚の事実は知らないようだった。

加えておれと父様によく似たシャルティの存在もあり、父様が隠している事実を知らなければ先に進める訳がないんだ。

まだ幼いから話せない、そんなことは理由にならない。

息子の不安な気持ちに父様はどう答える？ はぐらかすのか？

正直、そんな気遣いは不要だ。内緒だけど精神年齢だけ三十路になっているんですよ、おれ。

多少の込み入った理由を聞いても動じないし、隠された方が困る。だからなんでも打ち明けてこい！

「ルディヴィス……そこまで思い詰めていたんだね……気づいてやれずにすまない」

父様は眉を下げて小さな声で続けた。

「まだお前は幼い……真実を知って傷つくかもしれないと、隠していたのは私の勝手な判断だったのかもしれないな……」

父様はおれの身体を抱き寄せ、少し考え込むように唸る。

「本当はお前が学園に入学するところに話す予定だったんだが、真実を聞きたいんだね？ わかった。後悔しないと、誓えるかい？」

父様が再び優しく頭を撫でながら、おれを真剣に見つめて問いかける。

「もちろんです、ぼくは何も知らない子どもでいたくない……！」

すかさず真実を聞きたいと頷くと、知らない間にルディヴィスはこんなにも大人になったんだね

と微笑まれた。

あ、すみません、中身が三十路になってます……とは言えないが、階段から落ちてまで再婚相手との対面から逃げようとするルディヴィスを考えると、父様は真実を言いたくとも言えなかったのかも知れない。

どこから話そうかと父様は呟き、ゆっくりと語り始める。

なぜこの家に母がいないのか、なぜペトラさんと再婚となったのか。

なぜシャルティはおれや父様に似ているのか……

まさか、想像の斜め上を行く答えが返ってくるなんて思ってもみなかった。

父様は教えてくれた。

おれの、ルディヴィスの本当の母様は隣国の公爵家に生まれた令嬢であった。

名はメルティーラ、大人になっても夢見がちで可憐な美女だったそうだ。

父様と母様は国同士の結びつきを強くするための政略結婚で結ばれ、おれが生まれた。

しかし、夢見がちなおれの母は子を産んでもなお、母親にはなれなかった。

子育てを乳母に任せるのはいい、そうする貴族は多い。

ただルディヴィスの母は生まれた子を我が子として受け入れる自覚も持てなかったそうだ。

「わたくしは母親なんてなれない、この子を愛するなんて無理なのよ」としきりに泣きじやくり子どものように拒絶を繰り返した。